
マカロンカラーヒーローズ

さすらい物書き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マカロンカラーヒーローズ

【Nコード】

N2455P

【作者名】

さすらい物書き

【あらすじ】

平見和人^{ひらみ かずひと}、17歳。あだ名は「ワト」。陸上部。専門は長距離。洋菓子屋の店員さんに一目惚れしたその日、彼は“勇者”として異世界に召喚される。もとの世界にもどるための条件は、三日後に迫る“魔王軍”の侵略から世界を救うこと。——ちくしょう。オレはなんとしても戻って、あのひとの笑顔にもう一度会うんだ——！最強難易度のクエスト。なのに“チート”とは呼べない不十分な能力。世界の破滅は刻一刻と迫る。勇者ワトの絶体絶命の冒険がいま、幕を開ける——。

000 プロローグ

したんじゃない。
落ちていた。

「いらっしやいませ」

甘いお菓子の匂いと、上品な紅茶の香りと、
透きとおる澄んだ声が出迎えた、友人に連れられてはじめて入った
洋菓子店。

そのひとは、他のお客さんの買ったものを箱詰めしながら、振り返
って顔をあげた。

オレの皮膚の温度は一瞬で2 上がり、
オレの心の温度は3 くらい上がった。

このお店の店員さん。
きれいなひとだ——ちょっと年上かな——オレより、三つか四つは
上だと思う。
白い肌。

髪を後ろの高い位置で結んでいて、きれいな首と背中がのぞいてい
る。

ざっくりしたニットの服に、お店のエプロンが似合っている。

その人と目が合った瞬間だった。

べつになにかをしようなんて気持ちはなかった。ひとつもなかった。けど——だから、ある意味これは不可抗力というか、事故みたいなもんというか——

「お待たせいたしました。——はい。ありがとうございました」

そのひとのまわりだけ、淡くやわらかい光であふれているように感じた。

客がそのひとからお菓子の箱を受け取り店を出ていく。
客を見送るうしろ姿やしぐさ、その表情に目を奪われた。

店長さんらしき40代くらいの女性に何か話しかけられたそのひとは、声を出して笑った。
歯をみせてくしゃつと笑う。
お客さま対応中のときの上品で優しい表情から、気どらない表情への変化。

世界中で一番きれいなピンクとホワイトを集めてきて作ったような、
柔らかそうな肌。
楽しそうに輝く瞳。
つやめく唇。
透きとおる声。

——パステルカラーの笑顔だった。

目が離せなかった。

透明感と、存在感は、同時に成り立つってことを知った。

「こんにちは。——おともだち？ ひょっとして、彼がワトくん？」

そのひとが、オレのとなりに立つ友人に声をかけてきた。

淡いピンクのオーラが見えて触れてしまうような、柔らかな雰囲気と存在感。

「はい、そうです。今日はホワイトデーのお返しの買い出しにつき合わせてます」

セーロクがそのひとの挨拶にそう答えた。

顔見知りっぽい。親しげな口調。セーロクはこのお店にちよくちよく立ち寄っているって聞いてたけど。

しかし——

どうしてくれる。いきなり自分の名前を呼ばれて、オレは柄にもなく固まっちゃったぞ。ろくに返事もできてない。

「義理チヨコ？ 本命？」

続けてそのひとはセーロクにたずねる。

「義理チヨコです。部活の女子マネージャーの二人に、オレやワトも含めて陸上部男子からのお返しってことで」

「そつか。——ごゆつくりとご覧になってくださいね」

その人は柔らかくほほ笑むと、カラフルなタルトやプリンやショートケーキが並ぶショーケースの向こうへ行ってしまった。

胸がドキドキ鳴っている。

額には汗が浮かんでいる。

3月13日。まだ寒い季節だけど、店内に暖房はたぶん入っていない。

店の外は寒かったから、オレもセーロクも上着を着ていた。

オレは、愛用のグレーのパーカーを脱いで腕に持った。

「で、なににするんだ」

オレはそれらの動揺を気づかれないように平静を装い、セーロクに質問した。

「マカロン。オレはホワイトデーのお返しはここ何年かずっとマカロンにしてるんだ。美味しいし、きれいだしね」

「マカロン。食ったことねえな。聞いたことはあるけど」

「ここに並んでるよ」

セーロクが示した個所に、マカロンという名のお菓子が色とりどり、並んでいた。

木苺のピンク。
ミントの水色。
レモンの黄色。
抹茶のみどり。
ラベンダー色。
チョコレート。

形もかわいらしいが、色もきれいだ。たしかに、これは女子に贈れば喜んでくれそうだ。

「マカロンもいろんなお店を食べ比べてみたけどね、やっぱりこのがいちばん美味しいんだ。この6色を二つずつ入れて12個。それを二箱。それでいいね？」

「いいと思うよ」

オレはセーロクとそんな会話を交わしている最中も、あの人のことを盗み見ていた。

可愛いのに美人だ。

上品な顔立ちなのに、親しみやすそうな表情。

店内に、店員さんは計4名。

店の奥の方は買ったものを食べることができるテーブルがいくつかあって、そっちの方にひとりと、レジにひとり。それに店長さんと、あのひと。

あのひとは、ショーケースのところが定位置らしく、次の女性客——常連客っぽい——にお菓子の説明をしていた。

「なあ、セーロク。あのショーケースのところにいる店員さん、前からいる人なのか？」

オレはたずねた。

「そんなに前からじゃないよ。去年の夏ごろからじゃなかったっけ。田中愛さん。19歳。パティシエ目指してたことがあるらしくて、お菓子のことにはプロ並みに詳しいよ」

——愛さんっていうのか。

19歳。オレと二つしかかわらない。

すごい大人っぽいのに、同じ10代なのか。

「オレのこと、あのひとに、なにか話してたのか？ オレの名前知ってたけど」

「オレがワトと歩いてるところを見かけたことがあったらしくて、その話が出たときに話した。幼なじみで同じ陸上部にいるって」

「なるほど」

オレはそれだけ聞くと、ショーケースの方へ近づいた。

「——こちらの6種類のマカロンを二つずつ入れて12個入りにしてもらっていいですか？」

オレは愛さんにそう話しかけた。

近くで、彼女の声を聞きたかったのだ。

「こちらのマカロンですね、かしこまりました」

言葉は丁寧なのに、自然に気さくな印象を与える声色。社交的なひとが持つ天然の雰囲気というか、相手をリラックスさせるような口調だ。

「それを二箱お願いします」

「12個入りを、二箱ですね。ありがとうございます」

間近で見ると、一段ときれいで可愛い。

漂っている洋菓子の甘い香りの中で、どのスイーツよりも甘くおいしそうに見えるそのひと。

……食べたら、きっと甘くておいしい。

オレはやけにリアルな夢の中にいるような感覚で、そのひとからマカロンの入った箱を受け取った。

「はい」

「どうも」

わずかに彼女の指先が触れた。

なにかがオレを走り抜けた。
胸の動悸が強まった。

「また、来ます。見てたら、食べてみたくなりますね。美味しそう」

オレの言葉に、そのひとは嬉しそうにほほ笑んだ。

「気に入ってくれて、良かったです。またのおこしを、首を長くして待ってるね」

なにかをしようってつもりは全然なかった。

もちろん、恋なんてするつもりはまったく。

けど――

溶けていくバタークリームに足元から沈んでいくかのように――

オレは、恋に落ちていた。

001 召喚前

セーロクがコンタクトレンズをはずしている。

——だれかがコンタクトをはずしているのを見るといつも必ず、「目からウロコがおちる」という慣用句を思い出す。

ただこの場合、“ウロコ”をつけている方がモノはよく見えるわけで、意味は真逆になってしまう。

そんなことを考えていると、

メガネをかけたセーロクが荷物をかかえながら「おまたせ」とつぶやいた。

オレも自分のバッグを斜めがけにして、部屋を出ながらセーロクに云った。

「大好評だったな、マカロン」

月曜日。

ホワイトデー当日。

セーロクは陸上部の部長として、部員16名から300円ずつ徴収して準備したマカロン6色12個入りのおしゃれな箱を二人の女子マネージャーにそれぞれ手渡し、マネージャーは大喜びだった。

オレたち男子がバレンタインでもらったのは、部員全員に対しチョコふた袋だった。

だから値段的には倍返し以上だっただろう。

セーロクはお返しの金額設定について「ふだんから絵美ちゃんと未悠ちゃんにはお世話になってるし、男子からの日ごろの感謝もこめて、これくらいいしとかないと」とオレに説明していた。

「あぶないところだったよ。箱の中身を見るのはいいんだけど、マカロン見た男たちがうまそう、美味しそうってさわぐから、オレあわてて『食べられる前に隠した方がいいよ』って云っちゃった。オレがそう云わなかったら男子、一個ずつもらって食べてたでしょ」

「あ、オレもらうつつもりだったぜ」

云われてみると、たしかに16人で食べたらさすがに本人たちの持ち帰る分が激減してしまうな。

「部員が気が利かないと、いろいろと気遣いが上手になってありがたいよまったく」

別に気を悪くした風でもなくセーロクはそうつぶやいた。

放課後、部活終わりの夕方。

もう日は暮れかけてあたりは夕焼けの色に染まっている。

空は曇っている。不気味に赤黒い空の色。

空気は冷たく肌寒かった。

「今日も、あの店に寄って帰る」

オレはセーロクにそう云った。

「え？ クチュールに？ うん。べつにいいけど。——家のひとに、ホワイトデーのお返しとか買うの？」

「いや。……いや、それもいいな。母さんと妹にお返しを買って、
ことでいいか」

「……なに？」

「ぶっちゃけていうと、……昨日お店にいた、田中愛さん。あの人が目当て」

オレは早々に白状した。

セーロクは、勘がいいやら洞察力があるやらで、自分の恋心を隠しておく自信がなかったのだ。

「へえ。びっくり」

あまり驚いてるようには見えないのは気のせいかな？

「あんなきれいなひとが働いてるんなら、オレにも早めにひとこと報告しておいてほしかったぜ」

照れかくしにオレは愚痴るまねをする。

「ワト、ふだん女子とか恋愛とかに興味ないからさ。悪かったな。まあ、がんばってよ」

「ああ」

あのひとが働く洋菓子店「クチュール」は、学校から南へまっすぐ下り、大きな道にぶつかる場所の、角に立っている。

クチュールから東に行けばセーロクの家の方角。

クチュールの手前の道から西へ行けばオレの家の方角。

ふだんは部活終わりに一緒に下校しても、クチュールに辿り着く前の角でオレたちは分かれていたのだ。

今日はクチュールまで行ってから分かれるとしよう。

甘いものが大好きなセーロクは、少なくとも週に一回はクチュールでお菓子と紅茶を楽しんで帰っているのだそうだ。

夕暮れの冷たい風が吹く中を、あの人が待つ洋菓子店へ急ぐ。

灰色のフードを、外気が少しでも入りこまぬよう首元に寄せた。

クリーム色の壁に茶色の木の柱。赤っぱいオレンジの屋根。

周囲の道よりちよつと高くなっている場所に立つ洋菓子店。

オレたちが来る北からの道の方と、東西にのびる大きな道の方、どちらからでも入れるように二か所入口があつて、建物までは数段の階段がある。

クチュールの西側の雑貨屋との間に庭があつて、店内からはガラス越しにその庭を見ることが出来る造りになっていた。

「で、どうするの？ お茶飲んで帰るつもり？」

「そつだなあ。ゆっくりしていききたいけど、今日はやめとくわ。今日は家のものにホワイトデーのお返しを買ったために来たって設定だ

から。それだけ買って帰る」

「了解」

オレとセーロクはクチュールへの階段を上がり、入口のドアを開けた。

からんからん、と音が鳴る。

店内を見回す。

昨日いた店長さんとレジの女の人の姿を確認。

……あのひとの姿は——ない。

ショーケースを眺めながら、西側にある飲食のできる方へと進んで、見渡す。

——いない。

「今日はいないのかな」

「うっん、月曜日のこの時間はたいていいるんだ。ちょっと店の奥に行ってるだけかもよ」

「そうか。……セーロク、予定変更だ。奥でお茶しよう」

「あ、そうなの。じゃ、食べるのを選ぶつか。今日はちょうどかぼちゃのタルトが食べたかったんだよね」

セーロクは急に機嫌が良くなった。うきうきしながらショーケースを眺める。

どうやら、きょうはもともとは食べないつもりの日だったらしい。オレにつきあって食べるといふ大義名分でもできたのだろう。ダイエツト中の女子みたいな発想のやつだな。

「ワトは何にするの？」

「マカロン」

テーブルについた。

セーロクはタルトとオレンジペコーの香りを楽しみ、オレはマカロン——本当に美味しい。食感も、風味も、初体験の味わいだ——を口に放り込み、アールグレイをのんでいると、楽しげな澄んだ声が聞こえてきた。

あのひとが、もどってきた。

彼女はすぐにオレたちに気づき、近づいてきてくれた。

今日は髪の毛をおろしている。

鎖骨の下あたりまでくる長さの、こげ茶色の髪はゆるく揺れていて、頭には控えめの髪飾り。

カチューシャじゃなくなつてなんて云つたっけ——セシルが前、云つてたな——そう、カチュームだ。

カチュームで、ゆるめの絶妙な髪形にしている。

昨日はざっくりの白のニットだったけど、今日はふわふわしたキメの細やかなパステルブルーのニットに、白いスカートだ。

「いらっしゃい、セーロクくん、ワトくん」

「こんにちは。今日も来ました」

オレはセーロクよりも先にあいさつした。

「髪形が変わると、また少し雰囲気が変わりますね」

オレは思ったとおりのことを口にした。

「あれ、気づいてくれた？ 嬉しいなあ。どっちの方がいいかな？」

本当に楽しそうに笑うひとだ。

「上げてるのもおろしてるのも、どっちも好きです。昨日は——清楚だけどセクシーって感じがして、今日は……可愛くて、きれいです。日替わりとかで、どちらもお願ひします」

「うわ、ありがと！——若いのに、ほめるのが上手ですね。さすがセーロクくんのお友だち。とても高校2年生とは思えないんだけど」

大人の女性にそう云われるのはなんか嬉しかった。

「オレも、こんなにパステルカラーの似合う女のひとは、見たことがないです」

「この服？ ふわふわしてて可愛いでしょ！ やっぱり男子には好感度高いなあこういう服」

本当に屈託のないひとだ。感情が、ストレートに顔に出るひと、って感じがする。輝いている笑顔を見て思う。喜怒哀楽の感情のうち、喜と楽が多く、パーセンテージを占める毎日を送っているひとが持つ、澄んだ明るいオーラ。周りをも明るく照らす雰囲気。

お菓子のことや、

陸上部の練習のこと、

セーロクとは幼稚園のときからの幼なじみであること、それらの話題で、——愛さんは仕事だったし今日はホワイトデーでお客も多いかも知れないと思って——ほんの2分くらいの会話を交わしただけだったから、オレはだいぶ物足りなかったけど、それでも愛さんと近くでおしゃべりができたのは幸せだった。

——冷めたアールグレイを飲みほした。

「……どう、満足した？」

セーロクが小声でオレに訊いてきた。

「2分くらいの会話じゃ満足はしないけど、十分な収穫だったと思う」

「2分って。オレ、時計見てたけど5分はしゃべってたよ」

「あ、そうなのか」

わからなかった。

「恋をすると時間が過ぎるのが速く感じるんだと。ワトも例にもれず、ってことか」

興味深げな口調でつぶやいてやる。

オレは皿とカップの乗ったトレイを持って立ち上がった。「そのままでけっこうですよ」という別の店員さんからの言葉に甘え、トレイをテーブルに戻すと、荷物を持って出口へ。
レジでその店員に支払いを済ます。

「ワト、お母さんとセシルちゃんにホワイトデーのお返し買っんじやなかったっけ」

「……ああ。そうだった」

そういう設定だった。家族にお土産を持って帰るのも、たまにはいいか。

お菓子が並ぶショーケースの方へ向かう。

——また、あの人の姿はなくなっていた。今日はなにかと忙しいのだろう。

また、会いに来よう。

そんな確固たる決意を胸に抱いていると、うしろで扉のひらく音がした。

からんからん

「……あれ？ まこっちゃんに、かずくん？ 珍しいね、二人でこんなところにいるなんて」

聞き馴染んだ声がした。

店内に入ってきたのは、つばきだった。

柿崎つばき。セーロク同様、幼稚園のときからの幼なじみ。オレのことをいまでも「かずくん」と呼ぶ、数少ない人間の一人だ。

その後ろにつづけて――クラスメイトの渡瀬佳代の姿もある。

「おつ。ばつきー、そのポンチョも似合うね。新作？」

セーロクが挨拶代わりにつばきにそう云う。

「うん。おニユー」

つばきが答える。

「渡瀬さんは、アルバイト帰り？」

つづけてセーロクは渡瀬に声をかけた。

「……うん」

渡瀬はいつもの、ちょっと困ったような表情を浮かべて答えた。

「まこっちゃんは甘い好きだけど、かずくんがお菓子屋さんにいるのは、似合わないなあ」

「いいだろ別に。ってゆーか、おふくろと妹にホワイトデーのお返し買いに来たんだよ」

「あら、なるほど、なつとく」

つばきを外で見かけるときは、たいがい今日のように帽子をかぶり、ポンチョをまとっている。「趣味：ポンチョ集め」とは本人の言。髪形はいつもショートカット。そして冬になるとさまざまなニット帽をかぶる。

いっぽうの渡瀬佳代は制服から着替えていない。制服の上に、ミリタリーなカーキ色のコートを着ている。

ぺたんとしたポリウームのない黒髪。長さはあごのラインくらい。小さい目。きゃしゃなからだつき。

セーロクは「バイト帰り」と云ってたけど、こいつ、何のバイトしてたんだけ。

あとで聞いてみるか。

つばきと渡瀬はここで何を買うのか決めてきていたようで、あまり選ぶのに時間をかけずにいくつかのお菓子を買った。応対は店長さんがしていた。

二人を待つ義理はなかったのだが、セーロクがつばきとしゃべって

いたり、……オレも、しばらく待っていたらあのひとが戻ってくるんじゃないかって少し期待してたりもしたので、けっきょくクチユールを四人そろって出ることになった。

あのひとは、もどってこなかった。

風が強い。

店のドアを押し返すように風が吹きつけている。ちょっと体重をかけるないと開かないくらいの強い風圧。

オレがドアを開けているすきに、セーロクが「おさきにどうぞ」とつばきと渡瀬を外に出す。

三人が出てから、オレはドアを閉めた。

冷たい——真冬のような風が吹いている。大きな風の動き。空と大地の間を行ったり来たりしているかのような風があたりを吹きすさぶ。

「さつむー！」

つばきのポンチョは季節を先取りした春先用のようで、そう厚くないみたいだ。

渡瀬のミリタリーコートはもこもこしたムートンがついていてあったかそうだ。

「つばきちゃん、うちのマフラー使い。うちは平気やから」

「ごめん佳代。借りるよ」

つばきと渡瀬が階段を下りる。

そのあとをセーロク。最後にオレ。

オレが階段を一步下り、二歩下り――

――ぐうん――！

なんだ？

なんか変な感触が全身を覆った。

身体がこわばる。

走り抜けた違和感。

鳥肌が立っている。

ちよつと――めまいもする――いや、もう……おさまっている。

なん――なんだったんだ、いまの？

――表現できない感覚だった。

なんというか――帯電した巨大なゴム手袋で、全身をわしづかみにされたような感覚――。

冷や汗が伝っていた。

「――どうした、ワト」

……セーロクの声。

階段の半ばで立ちつくしているオレ。

「いや……ちよつとめまいがした。もう大丈夫だ」

オレはそう答えた。

「そうか。長距離組はオレたちより走ってる距離が違つからな。風に飛ばされないようにして帰れよ」

「……だいじよぶ？ 平見くん」

気づくと、渡瀬がこっちを見ていた。

「ああ……わりいな。ちよつと疲れてたみてえだ」

「ええっ……むっちゃ顔色悪いやん。風邪気味とかなん？」

「顔色……悪いか？」

たしかに、あの“帯電ゴム手袋”感覚が襲ってから、変な違和感は去っていない。

「青ざめてる」

「なに？ かずくん具合悪いの？ 家まで送っていいっか？」

つばきがあっけらかんとそう云った。

「いいよ——」

オレが断りかけたが、

「それじゃばつきー、あとはまかせた。オレ、帰るから、ワトのこ
とよろしく」

セーロクがそう云ったため、オレとつばきと渡瀬は、――まあ家の
方向はそれなりに一緒の方向ではあったので――三人で帰路につく
ことになった。

「バカは風邪ひかないってというのは嘘なんだね」

「しみじみ云うなよ」

つばきの言葉に返事をするオレの声にはたしかにいつもの力がない。
そのうち会話が減り、渡瀬が押す自転車のたてる軽い回転音が耳に
入る。

あの激しかった風はやみ、今はうそみたいに静かだった。

クチュール沿いの東西にのびる道路は、歩道がとても広い。その歩
道を、力のない足取りで歩くオレと、そのオレのスピードに合わせ
て歩いている、つばきと渡瀬。

「……なあ」

ちよつとだけ生まれた沈黙がふくらむ寸前のタイミングで、渡瀬が
言葉を発した。

「前から気になってたんやけど……、どうして“ワト”と“セーロ

ク”っていうあだ名になったん？　うち、その由来聞いたことないねん」

「ああ……。たしか、小学校6年のときだったかな――」

渡瀬の質問に、オレは答えた。

「学校の授業であつたら、じぶんの名前の由来を親に聞いてきて、作文作って発表しなさいってやつ。あの授業のときからだな」

「ああ、あつたね、そういえばそんなこと」

つばきがあいづちを打つ。

「オレの“かずひと”って名前は、オレのおやじが、世の中がどんどん西洋かぶれになっていくことを嘆いて、『お前は日本人らしく、“和”の心を持った人になってくれ』っていう願いを込めて名づけたんだと。その話を発表したらセーロクが、『和人の“和”は和風の“和”なんだ』みたいなことを云つてきて、それで“わのひと”ってことで、『ワト』ってセーロクが呼びはじめたのがきっかけ」

「へえ……！」

「ふうん」

渡瀬は本当に驚いたように、

つばきもそれなりに感心したようにこの由来話を聞いていた。

「『セーロク』のほうも、その授業のときからオレが呼びはじめた」

セーロクの本名は長家誠。ながいえまこと

父親の名前が「誠吾」で、じいちゃんの名前が「誠四郎」だったらしい。

じいちゃんと父親はここ何代が続いてきた「誠」の字を受け継がせたいと考え、長男である誠に「誠六」という名前をつけようとしていたが、それじゃあまりにも響きが古臭いと母親がふたりを説得し、「誠まこと」という名前になったらしい。

「この由来話を聞いたオレが、『もともとはセーロクって名前の予定だったんじゃない』みたいなことを云って、呼びはじめたのが、セーロクにあだ名のきっかけだな」

「……おもしろいね」

渡瀬が、笑いを必死でこらえてるような表情でそうつぶやいた。

「……あつ。もしかしてそれじゃあ、セシルちゃんの名前がカタカナなのは、かずくんのときの『和風に！』っていうやつの変動なの、ひょっとして?！」

つばきが大きな声を出した。

「そのとおり、正解。妹が生まれたときも『和風に和風に』って云いつづけていたおやじに猛反発したおふくろが、女の子の名前は自分がつけるって意気込んで、セシルってつけたらしい」

つばきが腹をかかえて笑いはじめた。

渡瀬も我慢できずに声を出して笑いだした。

女子高校生が二人。箸が転んでもおかしい年頃とはこういう年代を

云うのだろっ。

日はずいぶんと暮れてきた。

クチュールから歩きはじめて数分。

さすがに家の前まで送ってもらったこともないだろう。

こんな日暮れだ。逆にオレの方が女二人を家まで見送った方がいいんじゃないか？

そうしよう。

身体や頭に多少の違和感が残っているが、特にどこが痛いとか苦し
いってことでもない。大丈夫だろう。

「……ふたりとも、ありがとうな。オレ、もう大丈夫だから。逆に
さ、暗くなってきたからお前らを家まで送るよ」

「平見くんあかんで。さっきまでめっちゃ具合悪かったのにそんな
急に良くなるわけないわ。……なあ、つばきちゃん」

「そうね……。あでも、たしかに顔色はもどってるみたいよ。こい
つ、回復力あるからだいじょうぶなんじゃない？」

「そんなあつばきちゃんまで……」

「渡瀬、そういうことで決まりだ。どっちの家の方が近いんだっけ
？」

オレがつばきにそう尋ねるとつばきは

「いやいや。あたしらも送ってもらわなくても平気だって。じぶん
らで帰るよ。ね、佳代」

「うん……そうだね」

「だけどマジでもう日が暮れるぞ。変質者とか出るかもしれないぞ」

「変質者かぁ。でも、この辺は道も広いし店とかも多いし街灯も明
るいし。ホントいいって」

つばきの言葉に対しオレはもうひと押ししようとしたが、

「犯罪とかって、人が起こすんじゃないって場所が起こすんだよ。犯
罪が起きるのは、犯罪が起きるような場所に限られるの。そういつ
た場所に近寄らなかったらだいじょうぶなの」

自信満々のつばきに、オレは説得されてしまった。

「……そうか。わかった。じゃ、気をつけてな。今日は悪かったな」

「いいよ。面白い由来話聞けたしね」

「うん。……じゃあ、またね平見くん。おだいじに」

「おう。おつかれ」

つばきと渡瀬と分かれ、オレは自分ちの方への道をひとり歩きだし
た。

歩きだして数秒たった、そのときだった。

また、風が激しく吹きはじめてきて――

ぐううん――

「?!」

まただ、あの変な感覚だ――！

音をたてない静電気が充満しているような不穏な気配が周囲に満ちている。

やばい。そう直感で思った。

ぐらあ――っ

めまいが襲ってきた。

思わずよろめき、地面に膝をつく。

うつ……なんだ、これは。

さっきのあの感触だ。

帯電した巨大なゴム手袋に、オレは再びわしづかみされる。

身体を通り越して、後頭部や脊髄を掴まれているような強烈な違和感。

拒絶反応に、身体が硬直する。

ぐううん――

違和感は続く。むしろ激しさを増す。

後頭部から首、背中の方が重い――！

押しつぶされるような圧迫感。オレの身体を狙って重力が働いているかのような感覚。

やばい。

意識が遠のく。

――なにかの病気だったのかオレは？

脳か、脊髄の病気。

それにより引き起こされた、めまいや違和感――？

オレはさっき二人と分かれた方を見た。

遠くにまだ、二人のうしろ姿が――ずっと遠くにだが、見える。

なりふり構ってられねえ。

二人を呼ぼう。

腹に力を入れ声を出そうとした――が、

声が出ない。

本気でマズイ。

言葉が出てこない。

全身から噴き出す冷や汗。身体が冷たくしびれてくる。
やっぱ脳の損傷？

——いや、

ちがう。

絶対にこれはオレの病気とかの症状じゃない。

これまで自覚症状なんてなかったし——
いや、そういう理屈はどうだっていい。
オレの身体のことにはオレはよくわかる。わかってる。

これは、オレの内的要因が原因じゃない！

外からの干渉による“なにか”だ。

ぐ　ぐ　ぐ　う——

押しつぶされる感覚がまた一気に強まった。

やばい。ちくしょう。

このままじゃ、——意識を失——う——

ちく——しょう——

倒れ込んだオレ。

目に映る、舗装された道路のアスファルト。

——せっかく買った、マカロンの箱が転がってるのが見える。

ちくしょう——！

押しつぶされる——

くそっ……

気絶、しちまう——

ちく……しょ——

……うっ——

ダメ、だ——！

……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2455p/>

マカロンカラーヒーローズ

2010年12月10日07時33分発行